

臨床レポート

黒毛和種における顎下の類皮嚢胞の一例

中山美佳¹⁾, 佐々木ことえ¹⁾, 庄野英子²⁾, 織田 楓⁶⁾,
庄野春日¹⁾, 渡辺康平³⁾, 三井一鬼⁴⁾, 一條俊浩⁵⁾

はじめに

類皮嚢胞 (dermoid cyst) とは, 胎生期に表皮組織が迷入して孤立することで生じる発生異常の一つであり, 病変は若齢動物にみられ, しばしば頭部や頸部の背側正中線上に好発するとされている [1, 2]. 牛では角膜, 結膜, 眼瞼, 舌, などで報告されている [3-6]. 類皮嚢胞そのものは無痛性であり臨床症状を呈さないことが多い. われわれの知る限り牛において顎下部における類皮嚢胞の報告はなく, 人においても顎下側方にみられる症例は少ない [7]. 類皮嚢胞について, 牛において眼周囲にできたものを外科的切除した報告は見受けられたが [8, 9], その他の部位で切除を行った報告もない. 今回下顎下部左側方にできた嚢胞に対し外科的切除を行い, 嚢胞が組織学的にも類皮嚢胞と診断され, かつ予後が良好であったことからその概要を報告する.

症状および治療と経過

発症牛は黒毛和種, 令和元年 12 月 13 日生まれの雄である. 令和元年 12 月 17 日 4 日齢 (第 1 病日) 時, 顎の下が膨らんできたとの稟告を受け初診した. 左顎下に 5 × 5 × 4cm の波動感のある腫瘤を認め, 穿刺したところ半透明の漿液が検出された. 疼痛症状はなく, 本牛の活力も正常であった. 畜主より経過良好との連絡を受け治療を中断し, 経過観察とした.

令和 2 年 2 月 10 日 (第 55 病日) 再度, 左顎下がソフトボール大に腫大し, 再診した (図 1). 該当箇所熱感はないものの, 圧痛が軽度により, 活力や食欲もやや減少していた. 穿刺により, 内容を約 250ml

除去, 生食にて洗浄後, プロカインペニシリン G (以下 PCG とする) を全身投与した. 内容は, 漿液性の透明水様液, 毛塊, フケを認めた (図 2).

内容除去後, 2 週間程度経過してから再び腫瘤が腫大し始めたとの稟告を受け, 同年 3 月 10 日 (第 84 病日) 再診した. 食欲不振もあり, PCG 全身投与, 患部を切開し洗浄, ドレーンを留置した. ドレーンは上部 1ヶ所, 下部 2ヶ所を交通させて排液した (図 3). 内容は透明水様液中に毛塊, フケ様物を認めた. 留置後 2 日間抗生剤治療を続け, 排液は良好であった. 同年 3 月 19 日 (第 93 病日) 活力食欲も回復しドレーン



図 1 左顎下がソフトボール大に腫大

1) 岩手県農業共済組合 岩手沿岸基幹家畜診療所

〒028-0555 岩手県遠野市土淵町土淵 19-20-7 TEL: 0198-62-5322 E-mail: haruka-n@nosai-iwate.or.jp

2) 同中部家畜診療所, 3) 同北岩手家畜診療所, 4) 岡山理科大学獣医学部病理学研究室,

5) 岩手大学農学部共同獣医学科, 6) 元 岩手県農業共済組合 岩手沿岸基幹家畜診療所

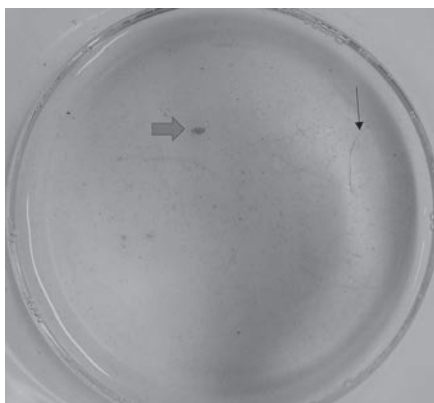


図2 漿液性の透明水溶液 (→毛, 赤⇒フケ)

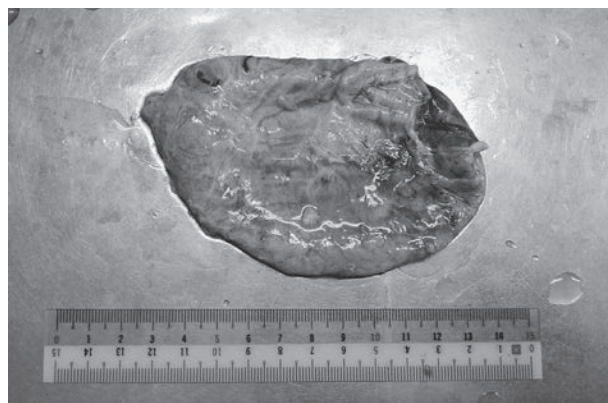


図4 摘出嚢胞



図3 ドレーンの留置による排液

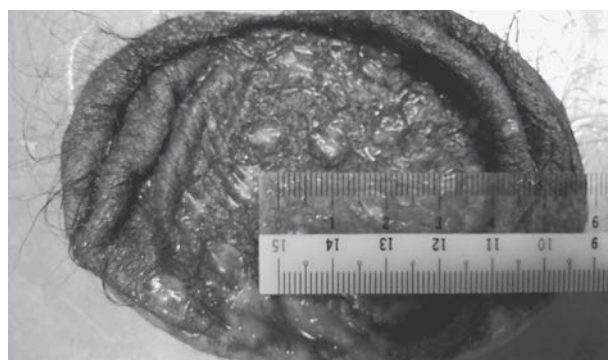


図5 嚢胞は硬い結合織に覆われ、内側には毛が認められた

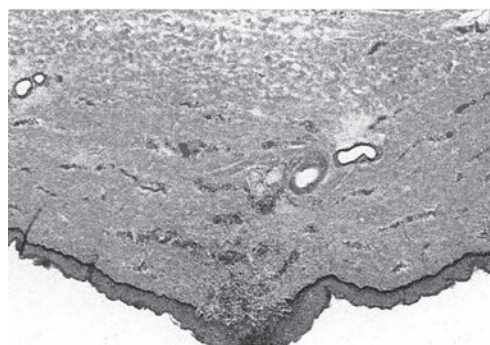


図6 嚢胞の組織像 (弱拡大)

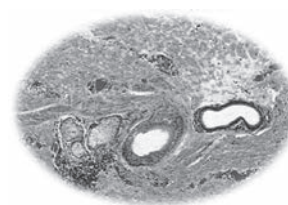


図7 脂腺,毛包,汗腺 (強拡大)

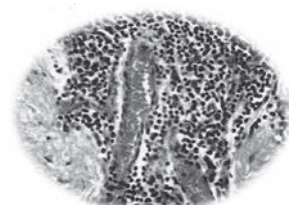


図8 血管周囲の細胞浸潤像 (強拡大)

を除去。除去したドレーンチューブ内には膿様物を認めた。ドレーン除去直後は腫脹も消失した。

しかしその後も約1か月毎に腫脹を繰り返し、穿刺による内容の除去を続けるも治癒せず、6月2日(第168病日)摘出手術を実施した。頸部を切開、鈍性剥離によって直径10cm球形の嚢胞を摘出した。術後4日間PCG、消炎剤等で加療し、同月12日(第178病日)に抜糸、経過観察とした。摘出した球形嚢胞については岩手大学 一條俊浩准教授を通じノーバウンダリーズ動物病理へ病理検査を依頼、三井一鬼診断医に診断していただいた。病変は非腫瘍性で、汗腺や毛包などの皮膚組織が認められ類皮嚢胞と診断された。

摘出嚢胞の外貌と病理組織結果

嚢胞は硬い結合組織に覆われており、内側には毛が認められた(図4, 5)。

組織学的には、嚢胞の内側は角化重層扁平上皮に覆われ、その下層に皮膚付属器官である毛包、脂腺、汗腺が散見された。真皮の血管周囲には多層性かつ軽度～重度のリンパ球、形質細胞主体の炎症性細胞浸潤が生じていた(図6, 7, 8)。

成 績

摘出手術後は予後良好で、8カ月齢で市場上場し55万2千円で売却された。

考 察

本症例では、顎下部という場所から唾液腺腫を疑い、また、血管、神経の集中する場所でもあったことから、ドレーンでの排液も試み、成長を待ってから摘出手術実施に至った。一般的な腫瘤状病変は肉眼のみの確定診断や良悪の判定を行うことが困難な場合があるが、本症例では、嚢胞内容が、漿液や毛、フケ等の上皮組織由来のものであった。類皮嚢胞は成長とともに皮脂や体毛の充満や炎症で類皮嚢胞及びその周囲が腫大化するとされ[7]、この点も類皮嚢胞の所見の特徴と言える。牛においてはその部位から唾液腺腫[11]や放線菌症[12]などとの鑑別も必要であると考えられ、今後農場での顎周囲の波動性腫瘤の診断において留意していく必要がある。

これまで牛における類皮嚢胞の症例の多くが眼において遺伝性疾患とされているヘレフォード種[3, 4]のものであり、黒毛和種[6]における報告は少ない。類皮嚢胞の摘出後の予後は良好とされることから[10]、本報が同様嚢胞の診断の一助となれば幸いである。

引用文献

[1] Mauldin EA, Peters-Kennedy J: Integumentary system, Pathology of domestic animals volume 1, Maxie GM ed, 6th ed, 704-705, Elsevier, Amsterdam (2015)

[2] Michael HG, Kyle HG: Epithelial and melanocytic tumors of the skin, Tumors in domestic animals, Meuten DJ ed, 5th ed, 134-138, John Wiley & Sons, New York (2016)

[3] Mauldin EA, Peters-Kennedy J: Integumentary system, Pathology of domestic animals volume 1, Maxie GM ed, 6th ed 547, Elsevier, Amsterdam

(2015)

[4] Barkyoumb SD, Leipold HW: Nature and cause of bilateral ocular dermoids in Hereford cattle, Vet Pathol, 21, 316-324 (1984)

[5] Alm MM, Rahman MM: A three years retrospective study on the nature and cause of ocular dermoids in cross-bred calves, Open Veterinary Journal, 2, 10-14 (2012)

[6] 山本直樹, 亀田真吾, 野一色香織, 来持幹夫, 森田剛仁: 慢性炎症を伴う舌の類皮嚢胞を認めた黒毛和種の一症例, 日本獣医師会雑誌, 73, 726-729 (2020)

[7] 山崎正, 細野純, 木村一雄: 巨大な顎下部側方型類皮嚢胞の一例, Dental medicine research 30(2), 156-160, (2010-07-31)

[8] P Tamilmahan, Priya Singh, Prabhaka: Surgical management of dermoid cyst in a cross bred calf Rashmi, Journal of Entomology and Zoology Studies (2018)

[9] A.K. Sharma, Lalita Kumari, Kumari Chandrakala and Pankaj Kumar Department of Veterinary Surgery and Radiology Ranchi Veterinary College: SURGICAL MANAGEMENT OF DERMOID CYST IN A CALF Laxmi Kumari, Kanke, Ranchi, Jharkhand, India

[10] 小林裕, 木野孔司, 間仁田浩一, 佐藤梨里, 菊池清志, 吉増秀實, 天笠光雄: 口腔顎顔面領域の類皮嚢胞および類表皮嚢胞の臨床的観察, 口科誌, 47, 101-107 (1998)

[11] 河原智, 小笠原俊実, 福村俊美, 小笠原成郎: 牛の唾液腺嚢腫の1治験例, 東北家畜臨床研究会誌, 14-1, 33-35 (1991)

[12] Geof W. Smith: Actinomycosis in Cattle, Swine, and Other Animals, MSD manual Veterinary manual (2020)